

7月20日(土曜日)午前10時から12時まで、県立広島大学1212会議室・1215会議室にて、センター主催によるHbpMSセミナー2019 遠藤邦夫公開講座①『地域包括ケアシステムに求められる薬局の姿とは』を開催いたしました。

本セミナーでは、本格的な人口減少と超高齢社会に対応するために地域包括ケアシステムの取り込まれる薬剤師の将来展望を確認して、これからの地域に根差した活動を見据えた組織的な薬局経営の在り方を考える機会を提供することを目的としました。

今回は、薬局経営に関心のある医療介護関係の機関や企業の方々を中心に40名余りが集い、開演にあたりセンター長から当センターの紹介と今回のセミナーの趣旨説明を行なったあと、遠藤邦夫 HBMS 教授から講師の飯島康典氏(社団法人上田薬剤師会会長)のご紹介がありました。

飯島氏は医薬分業の先進地域といれる長野県上田市を拠点にかけつけ薬局の実現に取り込まれる一方で、国が進める健康サポート薬局の先駆けとなる面分業を推進してこられました。

講演では、まず、薬局の現状とこれからのグランドデザインが示され、薬剤師会や薬局共同組合、薬剤師連盟などを中心とした薬局再編に係わる政策や調剤薬局の動向が紹介されました。続いて、イイジマ薬局による地域住民に寄り添った薬剤師による相談体制が紹介され、患者目線で見たとときの調剤待ち時間のストレスを軽減する仕組みといった、薬剤師のカウンセリング機能が求められることを説明されました。そして、最後に地域包括ケアシステムの構築に照らして、薬局が地域住民と顔の見える関係であることの重要性を示唆され、高齢を迎えて「虚弱(フレイル)」の要介護予備軍となるの方々に対して、薬剤師が思いやりや気づきを感じ取るといった、「予防」「相談」による地域密着型の薬局の本来あるべき姿から、生活者目線での医薬品の安心・安全に貢献する経営の在り方を説明されました。

飯島氏の切れ味の鋭い解説振りに聴講者の皆が聞き入り、講義の後の質疑応答も活発で時間一杯となって講演を終了いたしました。



